

講演要旨



夏苺 郁子

医療法人「やきつへの径診療所」精神科医

幼いころから、父の仕事の関係で、3年おきに引っ越しを繰り返してきた。親戚とのつながりも近所付き合いもなく、両親と私だけの閉鎖的な暮らし。父はほかの女性の家に入り浸りで、めったに帰宅せず、母は家事を全くしないので家はごみ屋敷だった。

カーテンを閉めきった真暗な部屋で、母は少しずつ病んでいった。壁に向かって「黙れ」と何度も怒鳴る母の姿に、私は縮み上がった。中学3年のとき、母は強制入院となった。高校生になって、両親が離婚。母を恨んでいた私は、その後10年間、一度も

母と会わなかった。一人でも生きていけるようにと医学部へ進んだが、次第にアルコール依存、摂食障害、誰かに見張られていると感じる「注視妄想」などに悩まされるようになった。症状「母から逃げた」という罪の

と言ったと思う。なんと答えたらいいですか。」と聞かれる。私には、答えが見つからない。それは、病になること、家族であるという自体が「不条理」であるからだと思う。家族の情は、医学や法律で簡単に解決できるものではない。誰にでも起り得る、この不条理に対する正解がないから、宗教や哲学の範囲を切り捨てず、自分のこととして考え、葛藤を抱えていつかほしいと思う。

「マイナスをプラスに変えようと必死になる必要はないと思います。マイナスを抱えていることが、他人の不幸せを分かちあけるものになるのです。あなたの仕事は、患者さんが不幸せだと思っていたことの中に、救いと光を見いだせるのではないのでしょうか。」母を亡くしたまま、母は母なりに精いっぱい生きたのだと素直に思えるようになった。そして、人はとても長い時間をかけて、コトコトと治っていくことができると実感している。

起こり得る不条理をわが事として考えよう

を和らげる薬を大量に飲みながら、主治医の医局に拾われて精神科医となった。そんな私が少しずつ回復へと向かえたのは、医療や薬の力もあったが、一番は人の力に依るところが大き

意識を感じていたと思う。医療には成し得ない、行動力が、私にとって大きな転機となった。よく、患者さんのご家族から「病気の息子が『病気になる前は親のせいだ』

患者さんの治療に行き話まったりとき、いつも思い出す言葉がある。ある講演会で知り合った、心を患う50代男性から聞いた言葉だ。